

## 中域圏の概念について

本プログラムは、中域圏という分析概念を押し出そうとしている。この概念を生み出した実践的な動機は、旧社会主義諸国研究の細分化に歯止めをかけるということである。実際、冷戦の終了後、バルト研究がワット・ワイルソン・センター・ケナン研究所から、また中央アジア研究がハーヴァード・デイヴィス・センターから株別れするなど、研究の際限ない細分化が進んでいる。1990年代には、これら空間的に細分化された地域研究の間に、体制移行研究という共通項がまだあったが、それさえもほぼ失われた。地域研究が細分化されても、それら相互間に交流があればよいが、ヴィシエホロド諸国研究者がバルト諸国について何も知らない（逆もまた真なり）、ロシア研究者がウクライナやベラルーシについて何も知らない（逆もまた真なり）といった状況は、とても正常とは言えない。

どうしてこのような研究の空間的細分化が起ったのだろうか。最大の原因は、研究者の多くが、スラブ・ユーラシアなどというメガ地域は存在しない、それは社会主義という強制力によって結ばれていたにすぎない、だから社会主義体制が崩壊した以上、かつての社会主義諸国研究は細分化して当然だと考えていることである。これは方法論上の問題であるので、後に考察しよう。別の原因として、冷戦終了後に旧社会主義諸国研究が陥った資金難があげられる。日本のような、基本的に国庫によって人文社会科学が賄われている国とは異なって、欧米では民間資金を導入しなければ研究は成り立たない。民間のスポンサーは、抽象的なメガ地域よりも、自分が利害関心を持つ特定の小地域に資金を振り向けようとするから、研究機関を株分けした方が資金獲得に有利なのである。

もうひとつの原因としては、スラブ・ユーラシア研究においてロシア人研究者およびロシア研究者がしかるべき責任を果たしていないということがあげられる。通常、帝国の崩壊の後には、旧宗主国が旧植民地の研究において重要な役割を果たすものである。たとえば、ヴェトナムの独立後も、フランスがヴェトナム研究において大きなウェイトを占めた時期が長く続いたと聞く。対照的に、こんにちのウクライナ研究やバルト研究においてロシアのヘゲモニーなど微塵も感じられない。ペテルブルクの科学アカデミー図書館は、ウクライナ語文献やベラルーシ語文献を調達することを公式に止めたそうである。奇妙なことに、こうした事態は、ロシアの歴史家がウクライナやベラルーシの「民族主義」史学を批判することを全く妨げない。彼らがウクライナ語もベラルーシ語も読めないという事実は、彼らを躊躇させる理由にはならないのである。もちろんここには、ロシア人特有の思い上がりや民族偏見のほかに、メトロポリスにおける研究と連邦構成共和国・地方における研究

を峻別してきたソ連の学術の伝統が、全く異なる状況下でも克服されていないという問題があるのである。

さて、方法論上の問題に立ち返ると、次の事が言えよう。従来の地域研究における地域概念は、多かれ少なかれ地域の単層性・同質性を前提としていた。ところが地球化の時代にあっては、このような地域概念は、分析上の有効性を失いつつある。旧社会主義諸国研究の細分化は、伝統的な地域概念を墨守した結果である。これほど極端ではないにせよ、地域概念の流動化（どこまでをヨーロッパ、あるいはアジアとみなすのか）は、他の地域研究も直面している問題ではないだろうか。

本プログラムは、従来、地域と呼ばれていた空間領域は、実際には、それぞれ個性的な中域圏（meso-areas）が束となって構成するメガ地域であったと考える。この地域またはメガ地域の重層性が、地球化の中で顕著となった結果、中域圏の概念を用いることが不可避となったのである。

中域圏とは、従来同質的と考えられてきた空間領域の一部が、隣接外部領域との相互作用の中で特殊性を帯びることによって生まれる地域である。研究目的により可変的・選択的な分析概念であり実体概念ではない<注1>。たとえば、かつての社会主義圏には、それぞれEU、イスラム圏、東アジア諸国の引力で、東中欧・バルト中域圏、中央ユーラシア中域圏、ロシア極東中域圏が生まれたとみなしうる。もちろん、ここにおける外世界との相互作用が中域圏形成に及ぼす影響は様々である。東中欧・バルト中域圏のように、EUの直接の影響下でそれが形成される場合もあれば、中央ユーラシア中域圏のように、サラフィズム（いわゆる原理主義、ワハビズム）やトランス・カスピ・パイプラインの問題が地域のある種の一体性を住民とエリートに自覚させるという、間接的な影響にとどまっている場合もある。

ともあれ、スラブ・ユーラシア地域に上述の遠心力が働いているのは間違いないが、その反面、スラブ・ユーラシアのメガ地域には、ユーラシア世界に独特の心性、社会主義期の共通体験、移行期に伴う困難といった共通項、すなわち求心力も働いている。ロシアの近隣外交を強化したプーチンは、スラブ・ユーラシア世界の求心力を体現しているとも言えるのではないだろうか。総じて、スラブ・ユーラシア世界は、とりわけ個性的な中域圏が緩やかに束ねられたメガ地域であると考えることができる。

中域圏と国家の関係は様々で、マルチナショナルな場合（東中欧・バルト）、トランスナショナルな場合（中央アジア、コーカサス、ロシアのヴォルガウラル地方から形成される中央ユーラシア）、リージョナルな場合（ロシア極東）がある。

母体となったメガ地域と中域圏との関係については、時間の経過に従って、1. 中域圏が独立した新地域になる場合、2. 中域圏が、隣接するかつての外地域に併呑・同化されてしまう場合、3. 中域圏が特殊性を強めつつも、母体地域への何らかの依存性を長期にわたって保ち続ける場合（逆に言えば、母体地域が中域圏の緩やかな東として、それなりの一体性を保ち続ける場合）、4. 中域圏が個性を失って再び母体地域に埋没する場合、の四つが想定される。スラブ・ユーラシア圏については、第三のシナリオが最も蓋然性が高いと考えられる。本プログラムが長期間の有効性を持つ所以である。

EU加盟によって、東中欧・バルト中域圏がスラブ・ユーラシア・メガ地域の西端の中域圏からヨーロッパ・メガ地域の東端の中域圏へと移行したと考えるのは早計である。バルト諸国では、「我々は脱共産主義諸国ではなくノルディック諸国だ」などと言われるが、これはプロパガンダにすぎない。もしこの言明が正しいのなら、デンマークやフィンランドの専門家の方が、我々スラブ・ユーラシアあるいは脱共産主義諸国の専門家よりも、バルト諸国が抱える諸問題をよく理解できるはずである。幸か不幸か、そのような事態は今後二、三十年間は起こりそうにない。また、本当にそのような事態になれば、バルト諸国はヨーロッパ・メガ地域の東端の中域圏になったと言えるのである。

中域圏の浮上は、地球化の結果であると同時に地球化への抵抗である。つまり、本来その社会に固有ではなかった規範を受容した、あるいは押し付けられた際に、ある空間領域が共通した一種の拒絶反応を示し、またこの拒絶反応を克服する方策にも共通性があると当該空間領域のエリートに認識された場合に、中域圏は浮上すると考えられるのである。東中欧・バルト中域圏について言えば、そもそもEUの形成自体が地球化の反映であったと同時に、アメリカ中心の地球化に対する抵抗であった。ところがEUが東方拡大するにつれ、新加盟国のEU懐疑論も強まってゆく。農業基金や構造改革基金が新加盟国に適用されないことによって、EU内格差は制度化されてしまった。これは、東中欧・バルト中域圏の一体性をいっそう強化すると考えられる。

同様のことは中央ユーラシア中域圏にも言える。周知の通り、イスラム世界におけるサラフィズム（いわゆるワハビズム）の高揚は、地球化に対する抵抗としての性格を持ってい

る。これは、中央ユーラシアにも波及するが、中央ユーラシアの伝統イスラムにおいては、神学上サラフィズムの対極に位置するスーフィズム（タリカチズム）が強いため、軋轢が起こる。その極端な形態は、1998年から1999年にかけてダゲスタンで起こった事態である。こうした軋轢の中で、中央ユーラシアのムスリムは、自分たちの伝統を再認識または再構築しながら、アラブ世界とは異なったイスラム世界を形成することになる<注2>。

中域圏と経路依存（歴史文化的背景）の関係について付言しておきたい。本プログラムは、1990年代の体制移行研究が現状分析に偏っていたことを反省し、人文科学のアプローチと社会科学のアプローチを結合することを目指している。このことは、脱共産主義過程で浮上した中域圏を、当該地域の歴史的文化的背景から説明しようとしているとの誤解を生みかねない。実際には、あれこれの地域の「歴史的文化的背景」なるものは、状況（たとえばEU加盟の必要）に応じて、功利主義的に構築されることがしばしばである。たとえば、ラトヴィア史学におけるバルト・ドイツ人の評価は、民族主義時代（ラトヴィア・ソヴェト史学は民族主義史学の後継者である）と親欧州時代（戦間期と共産主義崩壊後）とで180度変わっている。民族主義時代には、バルト・ドイツ人は残酷な搾取者だったと言われるし、親欧州時代には、バルト・ドイツ人は文明伝播的な役割も果たしたと言われる。ラトヴィア人がみずからのヨーロッパ性を主張するためには、その伝播者であるバルト・ドイツ人を悪し様に言うわけにはいかないのである（もちろん、こんにちのラトヴィアの学術活動のかなりの部分がドイツから流入する資金によって賄われているという直接的な事情もある）。本プログラムが人文科学を重視するのは、このような歴史認識の構築作業を批判的に分析するためでもある。

最後に、中域圏の分析概念としての有効性についてまとめておきたい。中域圏概念は、1. メガ地域の内部構造を遠心力と求心力の間のせめぎあいとしてみる。つまり、固定的ではなく動的・歴史的な地域分析の概念である。2. 比較分析、地域横断的分析を可能にする。広域的な視点を失わずに、地域の個性を明らかにすることができる。3. 地域の変動について、国際的影響、歴史的文化的背景（経路依存）、自然環境の間の相互関係を明らかにすることができる。4. 主権国家の枠を超えた、リアルな国際関係の分析を可能にする。同時に、地球化の実態に迫る概念である。5. 国際環境に依存する割合が高く、国家アイデンティティーの形成が完了していない新独立諸国を分析するのに特に有益な概念である。

<注1>本申請書では三つの中域圏をあげているが、これらはいくまで研究の重点地域としてであり、この他にも、たとえば、「改革後進国・正教中域圏」（ウクライナ、ベラルーシ、モルドワ）などを想定することは可能である。また、EU との関係で、ヴィシエホロド諸国とバルト諸国は同じ中域圏に属しているが、両者の間には、政党制のあり方等についてかなりの相違も見られる。また視角を変えれば、この中域圏を旧ポーランド文化圏、旧ドイツ文化圏に分けることも可能である。このように、中域圏は研究目的に即応する可変的概念なのである。

<注2>ダゲスタンのある町長は、私との面談において次のように述べた。「冷戦時代、自分たちは鉄のカーテンによって守られていた。私たちのイスラムは純粋だった。鉄のカーテンがなくなったおかげで、汚染物(ワハビズム)が入ってきた」。